



三笠を科学する

祝い 三笠保存100周年とふね遺産認定

横須賀の現在・過去・未来を考える会(GKM)

代表幹事 毛利邦彦(毛利塾塾長)

7月14日(火)に日本船舶海洋工学会より記念艦三笠はふね遺産に認定され、認定書と盾が三笠保存会理事長井上力氏に贈呈された。受賞番号は第57号。この受賞の主な理由は「世界最古の鋼鉄の戦艦」及び保存に向けた技術的な調査・研究が評価されたと思う。授賞式の後に、「記念艦三笠の調査・研究と保存について」と題して記念講演を行いました。この講演はZOOM配信されました。1902年に就航した三笠には当時の造船技術が各所に現存して、当時の造船技術の高さに驚きます。うれしいことはこのふね遺産の認定書類は三笠の日本遺産、世界海事遺産を展示してある区域にガラスケースに入れて展示されています。

今年は三笠保存から100年の節目に当たる。これに認定された三笠は未来永劫保存に向けて関係者の励みにもなります。この遺産には横浜国立大学名誉教授平山次晴氏の支援をいただいた。先生とは遺産申請について毛利塾で喧々囂々の意見交換を行ったことを思い出しますが、認定を受けて三笠100年への「プレゼント」の一つになった。三笠を愛し、誇りと思う横須賀市民として喜んでおります。「ふね遺産」は今年で10年目、この賞の浸透はされていませんが、日本は周囲を海に囲まれた国で、日本の発展は造船・海事が基盤です。今後さらに、「ふね遺産」の価値があがり、国民の宝「三笠」をより誇りに思うことになります。



記念艦三笠空中写真



ふね遺産賞



東京新聞の記事

「横須賀製鉄所建設現場からレポート」⑦

小栗と金銀貨幣比率の件に関して、遣米使節の年表と比率を紹介します。小栗がフィラデルフィアで金銀比率に関してわめいたという変な話の実際です。下記データは、万延元年アメリカでの金銀貨分析結果(「佐野鼎訪米日記」記載)の、アメリカ側提示文書の邦訳。※サンフランシスコで分析したが、再検査のためフィラデルフィアでも実施したという。

No.1 小判(文字金)。2/3が金、1/3が銀。667/1000は純金で其の他は化合物。含有銀とともに5ドル95セントに相当する。No.2 小判(保字小判)、4/7が金、3/3が銀。568/1000の純金含有。4ドル44セントに相当。No.3 小判(正字小判)、最近の鑄造であり当座に持参した。571/1000の金含有。まさしく4/7。銀を混合すれば、3ドル50セント相当。金のみならば、3ドル41セント相当。No.4 貳朱金。外面に1/3の金を含む。No.5 二分金。No.2の金の半分。ただし、1/4以上の金を含む。No.6 保字一分金。1ドル11セント相当。No.7 正字一分金。No.3小判の1/4。89セント1/4に相当。No.8 昔の「半一歩」銀。1840年頃日本人漂流者より取得。11セント相当。No.9 一分銀。数年前鑄造品。988~990/1000の純銀。36セント9分に相当。No.10 重28グレイン半の銀。(一朱銀かという) No.11 新一分銀。890/1000の純銀。33セント二分八厘に相当。No.12 百文銭。No.13 四文銭(らしい)。No.14 鉄銭。

日本から最新の貨幣も持参し、複数事例を分析に提供した事実が明らか(当方指摘通り)。米国金貨が900/1000の純度で製造されており、日本の小判もそれに近いことが、如何なる意味があるかまで、森田の意見も出ている。すなわち、金含有量自体で比較すると、多少日本側の損失という話。これを知っておけば、市民から変な質問を受けても大丈夫です。もっとも、金銀銭貨が現代のような公定価格ではなく、相互に変動し、尚且つ江戸と地方でも異なり、貨幣自体の金銀含有率の相違までであると理解させないと、更に変な事を言われる恐れはあります。(安池尋幸)



風洞おじさんの独り言⑦

夏島の風洞については、一通りの調査は終えた、もちろん課題は積み残したままである。米国公文書からの連合軍上陸時に撮影された横須賀夏島に存在していた「巨大風洞」は「いつ、だれが、何のために、どのような思いで、何をしたのか」との問いかけに、公開された著作本や公文書などを漁ったが、全くわからなかった。リドレ横須賀での写真展で情報提供を呼び掛けたところ、神奈川新聞が取り上げてくれた。この記事が栃木の杉山氏より、進駐軍が撮影した内部写真を提供してくれた。また多くの方々から関係する参考図書の紹介などの情報をいただいた。その中で偶然に発見された「種子島時休氏」の昭和18年の「ロケットエンジン用の燃焼実験」の報告書にてこの風洞が国産初のジェット戦闘機「橘花」の開発に用いられたことが分かった。さらに空技廠関係者の思い出話「青空」に風洞の様子が書かれており、種子島論文と一致した。さらに横須賀市中央図書館の佐藤明生氏から提供された日産への払い下げ時の写真にこの風洞の写真および周辺の写真が写っており、発動機(噴進部)の全貌が、接收時の構内配置図と一致した。この経緯について「三浦半島の文化を考える会」とガスタービン学会誌に投稿を予定している。戦後の風洞を担当していた科学部の前川氏も「風洞の思い出草」にも書かれていない、新しい発見である。この風洞は航空技術の発展に不可欠なものである。日本の航空機開発の技術の高さを検証できるが、時すでに遅し、この風洞によって開発されたジェット戦闘機、ロケット機(?)は活躍することはなかった。横須賀に海軍などの戦争資料館構想があったが、予算がないとの理由から頓挫した。次回からは海軍航空・技術ミュージアム構想についてを予定する(毛利、永久)

江沢暁彦作品展⑦ 「クラウン」



ピエロ (Pierrot)
はフランス語、
英語ではクラウン
(Crown)と言う。

面白写真⑦ 赤い靴履いてた女の子??



童謡「赤い靴」の替え歌
「赤い椅子座っていた
男の子 お母さんに連
れられ 行っちゃっ
た」

フランス人医師サヴァチエの生涯⑦ (江沢暁彦)

サヴァチエは横須賀、日本にどのような貢献をしたのであろうか? この評価は植物学、博物学(ナウマンゾウの化石の発見)が先行したため、医学的見地での評価がなされていない。横須賀にはその痕跡がない。実は日本におけるフランス医療についての研究は少ない。ドイツ医学、イギリス医学、アメリカ医学として招聘された外国人によって西洋医学が日本に普及した。日本の医学はオランダの出島の医官シーボルトが知られているが、ポンペによる体系的なドイツ医学は松本良順を経由して広く幕府の医師に西洋医学は普及した。その幕末時代に横須賀に在留したサヴァチエは横須賀製鉄所の従業員、家族だけでなく、地元民の要請により、外科手術を行い感謝状が日本を去るときに、送られている。富岡製鉄所の「マイエ」もサバチエの後に日本に着任している。横須賀(三浦郡)には明治14年の医師名簿に西洋医師、西洋種痘が約14%確認できる。横須賀の住民、医師はフランス医療の恩恵を受けている。サヴァチエは大病院構想を提案してのちの横須賀共済会病院創設の基本校となっている。横須賀市民として、サヴァチエの貢献を忘れることなく、検証することが大事である。

小川周親ら地元有力者の感状



転落した若者をサヴァチエが手術を行い起死回生した。当時の日本の医術では救命できなかった。出展; 竹中祐典氏

ZOOM 配信希望者はmourijukuまで連絡を。第1回は8月2日 20:30から 自由討議
第1回のテーマは「海軍航空ミュージアム構想」の提案について。横須賀の追浜・浦郷・夏島地域は海軍の航空機開発の大実験所と航空隊があった。この歴史的事実は郷土史家では手に負えぬ日本の航空機開発の拠点である。この大実験場は海軍航空技術廠(空技廠)と呼ばれ、組織的には横須賀鎮守府の下部機関であった。製作工場を有して銀河等を製造したが、量産は民間が行った。制式採用の審査機能のマザーマシンとして各種風洞を活用した。最近、毛利・永久にて夏島に巨大風洞の様と目的が明らかにされた。空技廠は日本の航空機技術開発の中核であり、次世代にこの事実を継承するためにミュージアム構想を提案するに至った。

会員募集中 年会費 1000円: 寄付・賛助会員募集中